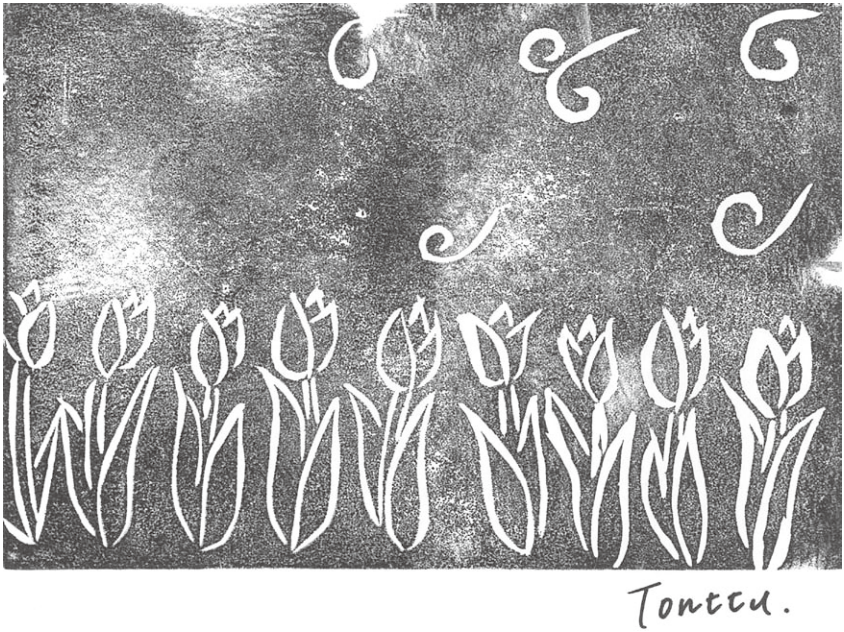
# 綴葉 ていよう

'22 3

No.405

あなたが創る生協の書評誌


## 話題の本棚

石田光規著『「人それぞれ」がさみしい ―― 「やさしく・冷たい」人間関係を考える』

永井均、森岡正博著『〈私〉をめぐる対決 ――独在性を哲学する』

## 特集／大学的読書事始め2022

新刊コーナー／私の本棚


〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階
Tel：771-6211 ／ E-mail：teiyo@s-coop.net
綴葉HP：http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

# でも、「人それぞれ」じゃないんじゃない。

## 「人それぞれ」がさみしい
### ――「やさしく・冷たい」人間関係を考える

石田光規著
ちくまプリマー新書

「結局、人それぞれじゃない」

そんな言葉をいったい何度口にしてきたのだろう。意見を求められれば「人それぞれ違うと思います」と口にして、対立が生まれそうになれば「まぁ、人それぞれだから」と回避してきた。あまりにも便利な言葉だから、あまり考えずに使っていた。……でも本当にそうなのかな。本当に、「人それぞれ」なのかな。

**「人それぞれ」が求められる時代**

本書は『友人の社会史』や『孤立不安社会』などで有名な石田光規による新書である。多様性が謳われる社会において以前よりさらに「みんなちがって、みんないい」と称される現代が何を喪ったのかを分析していく。

私たちは「人それぞれ」で済ませられる社会を生きている。豊かになった社会において消費の傾向は様々だ。身近な人間関係に依存することなく社会生活は回り、自分なりの娯楽を享受できる。

私たちは「人それぞれ」を尊重しなくてはいけない社会を生きている。個性を生かすことが求められ、ライフコースや好みが多様化していく社会において、安易に他者へ干渉することはリスクを伴う。性格だけでなく容姿にも多様性を尊重する社会では、人を気軽に褒めることさえも憚られてしまう。

**「人それぞれ」で喪ったもの**

ではそんな社会で何を喪ったのだろう。本書のタイトルにある「さみしい」という言葉が喪失した何かを象徴している。

「人それぞれ」は一見すると優しい考えだ。そこでは意見の違う他者を否定しない。傷つけることもなく善意を押し付けることもなく、優しく対立を回避していく。互いの主義主張がぶつからないままの平行線。「君は君、僕は僕」として片付けられる状況において、言いたかったことも、理解してほしかった思いも置いていかれてしまう。

そう、そこで失われたのは「本音」だったのかもしれない。本音を言うことがなければ対立することはない。そして対立することがなければ対話も生まれず和解する必要もない。本音を言い合わなくてもやっていける社交術は、本音を言えば親友になれるかもしれなかったアイツと距離を作る技術にもなった。誰だろうと個性を尊重する仕草が、誰と話していても癒えないさみしさを募らせる。

そう、そこで失われたのは「過程」だったのかもしれない。本当は「人それぞれ」じゃなかったのかもしれない。でも他者に踏み込むことが怖くて、自分に踏み込まれるのが怖くて、安易な言葉を結論にしていた。人を知る前に、「人それぞれ」と言っていた。

大学生活は出会いが多い。その場限りの関係もいいけれど、本音を言い合える関係に憧れるなら本書を読んでみては。学生時代に築いた友情は、きっと君の人生を豊かにするから。

（きもの）

（二〇八頁　税込九〇二円　1月刊）

# 〈私〉はいかにして哲学の問題となったか

## 〈私〉をめぐる対決
### ――独在性を哲学する

永井均、森岡正博著
明石書店

個人的には、ヨッ待ってました、と言いたい――二〇一九年に刊行がスタートした「現代哲学ラボ・シリーズ」、第二巻が昨年末にようやく刊行された。今回のテーマはずばり、現代日本を代表する哲学者・永井均の〈私〉の哲学である（前巻の内容を前提しているわけではないため、本巻から読み始めることも十分可能である）。

そもそも〈私〉とは何だろうか。第Ⅰ部では共著者の森岡正博が、その概要を手際よく説明する。この広い世界の中で唯一、現実のものとして痛みを感じられる私は、特権的な位置にある存在である。しかしこの特権性は各他人とて同じ事情、その共通性が言語化された途端に失われてしまうものでもある。こうしてどこまでも捉え損ねられながら、しかしその一方で「そこから世界が開けている唯一の原点」として欠かすことのできない「この私」――これこそが永井の言う〈私〉であり、他人たちとは異なる〈私〉特有の在り方を、彼は「独在性」と呼ぶ。つづく第Ⅱ部は、「現代哲学ラボ」イベントでの永井と森岡による対談の模様を収録する（この対談の音源はウェブで公開されている。また、対談で取り上げられる〈私〉論に関しては、岩波現代文庫所収の永井の論文集『**新版　哲学の密かな闘い**』を参照するとよい）。最終第Ⅲ部には、この対談の内容を踏まえた森岡の論考と、それを受けての永井からのリプライ、さらにこのリプライを受けての森岡の応答、という三つの文章が並ぶ。

本書の読みどころは、何を置いてもこの第Ⅲ部、二人の哲学者が交わすなんとも生々しく、とことん噛み合わないやりとりにある。森岡は対談中、永井の〈私〉論に感じとったある違和感をどうにか言語化しようと、永井の著作を初期のものから引証し、（森岡自身の問題意識とも関連づけながら）掘り下げていく。ところが、これに対する永井のリプライが、なんとも「容赦のない」ものになっている。曰く、森岡は永井の数十年前の論述よりも、現在のよりアップデートされた議論を取り上げるべきだ、という点に始まり、森岡論考の骨子をどうにか好意的に受け入れようとするも、最終的にその論点の多くは「理解できない」ものとして突き返されるに至る。

一見同じような問題関心と、同じような言葉遣いで論じようとしていた彼らの、この本気のぶつかり合いは何とも見物であり、その着眼点（問題のどの点が強調されるか）の微妙な違いを、読者はうまく汲み取らねばならない――誤解がないように言っておくなら、彼らは特に反目し合っている、というわけではない。議論はどこまでも平行線を辿るものの、そのやりとりは十分に論理的である。

またしても評者の私情を挟むなら、いつか永井の〈私〉の哲学を本格的に勉強しなければならない、と思っていたところであったため、本書の刊行は、まさに渡りに船であった。さてさて、つづくシリーズ第三巻では、第一巻の主役・入不二基義と永井が登場するとのこと。次巻を手に取る瞬間が、今から楽しみでならない。（**八雲**）

（三二〇頁　税込一九八〇円　12月刊）

## 〈特集〉大学的読書事始め2022

今年もこの季節が来た。新入生へのオススメ本のこの企画が誌上で始まって10年余り、のべ400冊ほど挙がったのだが、不思議なことにほとんど選書がかぶっていない。毎年34冊、何にしようかと編集委員は頭を悩ませながら候補を絞っているのだが、そんな苦労をよそに、分け入っても分け入っても本の山はまだまだ奥が深い。　（ねこ）

### 障害者とともに働く

藤井克徳、星川安之著
岩波ジュニア新書

障害のある人が働く社会を知ること。それは、総人口の二割に及ぶ隣人の苦境と向き合う行為である。低賃金、社会の偏見、発展途上の支援策。本書は、こうした問題の実態に迫るだけでなく、多数の成功例を以て「人に仕事を合わせる」労働の可能性を教えてくれる。対話に基づく積極的改善。これこそ万人に必要な、今を生きるための「労働手段」に他ならない。　（二〇四頁　税込九〇二円）

### 地域学入門

山下祐介著
ちくま新書

本書は社会学の立場から、生命、社会、歴史と文化、そして近代化による変容をキーワードに「地域」を読み解く。参照される具体的な事例は青森県津軽地域のものがほとんどだが、そこから明らかとなる事実は普遍的なものである。「地方創生」なる単語に踊らされがちな現代、そもそも私たちの住まう「地域」とは何か、改めて考える第一歩に本書を薦めたい。　（三二〇頁　税込一〇三四円）

（とよ／八雲）

### 科学史・科学哲学入門

村上陽一郎著
講談社学術文庫

今や自明とすら思われがちな「科学」も、元はと言えば、近代西欧に由来するものだった。前半でその成立に至る過程、およびキリスト教との影響関係を概観したのち、本書は後半、科学的実在や人間の心をめぐる哲学的問題を論じる。一文一文の長さにはやや難のあるものの、この本格的な入門書は読者に、科学とその限界について、改めて深い理解をもたらすだろう。（一九二頁　税込九二四円）

### ビギナーズ・クラシックス 中国の古典　論語

加地伸行著　角川ソフィア文庫

京大生たるもの、頭がイイだけじゃなくて、人格者でありたいじゃん？　そんなキミには『論語』だね。……大丈夫。漢文読めなくても十分楽しめるから。本書は孔子の生涯と、『論語』の格言がマルっと分かる一冊！　「仁」を説いた孔子の生き様、物語みたいにハマるはず。あ、格言リスト読んどけば、新歓でマウント取れるかも。……なんてね。人格オワてるやん。　（二七〇頁　税込七三三円）

（八雲／出席点）

## 尹東柱詩集
### 空と風と星と詩
金時鐘編訳　岩波文庫

水が湧き、霧は流れ風が吹く。尹東柱（ユンドンジュ）の詩は動き続けている。一見すると叙情的なそれは、揺らぎようのない思いを奥底に抱えていると感じられる。帝国統治下の植民地で育った彼は、禁じられていた朝鮮語で詩を書いていた。この国民的詩人は一九四五年二月、日本の刑務所でその若い命を奪われた。尹東柱の原詩、そして在日の詩人金時鐘（キムシジョン）の編訳と解説から成る一冊。（一八六頁　税込二六三八円）

## 石原吉郎詩文集
石原吉郎著
講談社文芸文庫

「ことばは結局は、ただ一人の存在である自分自身を確認するただ一つの手段である」――シベリアに抑留され、失語状態に陥った石原吉郎はこう述べる。そしてそれゆえ、ことばをうしなうことは「この世界で、ほとんど自分自身の位置をうしなうにひとしい」とも。本書は、詩人・石原吉郎による詩、批評、ノートをまとめたもの。彼のことばが持つ迫力は、圧倒的だ。（三二〇頁　税込二五四〇円）

（とよ／ぱや）

## 童話集　銀河鉄道の夜
### 他十四篇
宮沢賢治著　谷川徹三編　岩波文庫

報われないジョバンニ。優等生のカムパネルラ。星祭の夜、二人は銀河鉄道に乗る――。概要なら知っている。そんな君にこそ読んでほしい。ジョバンニが求める「ほんとうの幸福」。その意味が、小さい頃には分からなかったはずだから。車窓から見える宇宙の描写は美しく、二人が織りなす会話はどこか切ない。本書を片手に、さあ、鳴らそう。出発を告げる鐘（カムパネルラ）を。（四〇二頁　税込八三六円）

## 梶井基次郎全集（全一巻）
梶井基次郎著
ちくま文庫

「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた」――この重く切迫した一文から始まるのが、梶井基次郎の代表作「檸檬」だ。本書は、このまさに珠玉と言うべき一篇を含めた、彼の全作品を網羅したもの。つまり全集だ。それもたった一巻だけの全集だ。梶井文学のすべてが、ポケットのなかにすぽっと収まるのだ。だとしたらもう……、買うしかない。（五六〇頁　税込九六八円）

（出席点／ぱや）

## 空海の風景（上・下）
司馬遼太郎著
中公文庫

司馬遼太郎は「霞のかなた」の天才と呼ぶ空海の足跡を辿る。瀬戸内の凪に抱かれた讃岐、遷都を繰り返す混沌の京（みやこ）を経て、世界の中華たる長安へ――構想十余年、司馬と空海の長い旅路を共に歩こう。僧侶としてはあまりに明るく快活で、「うさん臭さ」さえある弘法大師の見た古の風景が現代に蘇る。空海を初めて小説の主人公とし、密教を世に広めた大著。（上巻　三七〇頁　税込七五五円）

## 文学部唯野教授
筒井康隆著
岩波現代文庫

「象牙の塔」に住まう者、先輩教授に阿諛追従、ポストは欲しいが妬みは怖い。作家で売れてもバレると困る。だって俗っぽいんだもん。アカデミアは世俗を超越している必要があるのである！　……という具合に喋りまくる唯野教授の物語です。文学理論の授業の一コマもありますが、本気にしない方がよろしい。あくまでもこれはフィクションですから。（三七三頁　税込一三二〇円）

（石透／ねこ）

## 水滸伝（全六巻）

井波律子訳
講談社学術文庫

たちまち始まる喧嘩沙汰。全編通じて何かと戦ってばかり。だが戦いの中で築かれる絆がある。暴力的だが憎めない主人公たち。彼らの行為に「正義」はないかもしれない。だが「信義」はあるんだろう。ノリはどこかの学ランでバトってる漫画と同じような気がする。そんな風に言われると少し身近に思えないだろうか、時代も国も違う彼らの物語が。

（一巻　七二〇頁　税込二二〇〇円）

## 源氏物語（全九巻）

柳井滋他校注
岩波文庫

岩波文庫の新訳が昨年遂に完結した。厳密な校訂、詳細な注釈と補訳が充実した本書は、古文の知識がまだある新入生にこそ手に取ってみてほしい。受験勉強では見えてこなかった源氏物語の全貌を理解した時、因果応報と栄枯盛衰を描いた光源氏の光と闇を垣間見ることになるだろう。日本文学の原点にして頂点の一つを大学時代に是非。

（一巻　六二四頁　税込一四五二円）

（ねこ／きもの）

## 種の起源（上・下）

チャールズ・ダーウィン著
渡辺政隆訳　光文社古典新訳文庫

アルファからデルタ、オミクロンへ。猛威を振るうコロナウイルスの変異型は今までに少なくともこれほどの種類が出現した。その陰でさほど知られず消滅した型もある。環境に適応するよう変異し、生き残る。ウイルスの進化に今我々は直面しているというわけだ。進化という概念を主張した原点の書をこんな時こそ参照してはどうだろうか。

（上巻　四二三頁　税込九二四円）

## フェルマーの最終定理

サイモン・シン著
青木薫訳　新潮文庫

「私はこの証明の解決に成功したがちょっとここに記すには…」。そんな謎めいた一言から三六〇年、シンプルな数式に表された難解な定理はワイルズによって解かれた。ただ、そこに至るまでにこの難問に挑んだ多くの数学者、そして数学の発展に関して、専門外の人にも分かりやすく読めるのが本書だ。数学の歴史を概観できる一冊をお手元にどうぞ。

（四九五頁　税込九三五円）

（ねこ）

## 唯脳論

養老孟司著
ちくま学芸文庫

この解剖学者曰く、唯脳論とは「ヒトの活動を、脳と呼ばれる器官の法則性という観点から、全般的に眺めようとする立場」である。心身問題はもとより、言語や時間にまつわる問題までをも「脳」という観点から捉え直すこの考察は、啓発的な内容となっている。多くの図版とともになされる叙述は、脳科学の門外漢にも分かりやすく、読み物として大いに楽しめる。

（二八八頁　税込九六八円）

## ゲンロン戦記
### 「知の観客」をつくる

東浩紀著　中公新書ラクレ

「ぼくは批評家で哲学者である。ぼくの批評と哲学は、ゲンロンの実践抜きには存在しない」と東は語る。その「実践」の本質は一見「ブルシット」な仕事にこそあった。思想誌『ゲンロン』を軸に「知の観客」の集う言論空間の創造を目指してきた気鋭の批評家・哲学者には不似合いの、あまりに泥臭く、悪戦苦闘に満ちた一〇年間を目撃せよ。

（二八八頁　税込九四六円）

（八雲／石透）

## アルケミスト
パウロ・コエーリョ著
山川紘矢他訳　角川文庫

八一か国語にも翻訳され、長く愛され続けているパウロ・コエーリョの不朽の名作。その所以は、やはり希望と勇気と愛――現代では捨てられ、ばかにされ、信用されなくなってしまったものたち――が詰まっているからだろう。強く望めば叶うと、もう誰も言えなくなったこの社会で、やっぱりまだ信じてみないか、物語の少年が望んだ夢を。君たちの旅路はこれからだ。（二〇八頁　税込六二六円）

## 精霊たちの家（上・下）
イサベル・アジェンデ著
木村榮一訳　河出文庫

ボルヘスやマルケスが好きなら、アジェンデも読んでみよう。ラテンアメリカ文学の担い手である彼女の作品には、悠久の時の流れを描き、現実の枠組みを超えていくあの想像力が脈々と受け継がれている。そしてファンタジーの背後に見え隠れする政治的緊張。死は日常であり、愛は瞬間だ。終わらない悲劇の中でも希望求めてやまない物語をあなたに。

（上巻　三四九頁　税込一二一〇円）

（トントゥ／きもの）

## 若い読者のための短編小説案内
村上春樹著　文春文庫

村上春樹による短編小説案内――と聞いただけで、なんだか面白そうな気配がぷんぷんとする。本書は、村上春樹が作家として短編小説をどう読むのかを、文章のかたちにしてみたもの。吉行淳之介、庄野潤三、長谷川四郎といった作家たちの短編が取り上げられる。優れた小説書きであると同時に、優れた小説読みでもある彼の、鮮やかな読み解きは、まさにお見事の一言。（二五六頁　税込六八二円）

## 西洋美術史入門
池上英洋著
ちくまプリマー新書

美術について何も知らずとも、心をうたれる作品と出会うことはできる。しかし、ある名作から現代アートに至るまで、どのような歴史が築かれてきたのかを知れば、より一層その絵が人の軌跡の一部であるということが分かるはずだ。本書は写真も多く読みやすいうえ、巻末にある参考文献リストは、西洋美術史にはまったあなたの次なる一冊をきめてくれるだろう。（一九〇頁　税込一〇四五円）

（ぱや／トントゥ）

## 神曲（全三巻）
ダンテ著　平川祐弘訳
河出文庫

世界文学の古典にして、今尚人々を魅了してやまない『神曲』。永遠の理想的美女として描かれるベアトリーチェとダンテの旅は、地獄・煉獄・天国を巡っていく。古代の歴史や神話を土台としたこの物語は、西洋ファンタジーの一つの起源でもある。異世界転生ものに嵌っているそこのあなた、退屈な設定の奥行きを知りたいなら、神曲を読んでみては。

（地獄篇　五〇九頁　税込一〇七八円）

## フランス革命の政治文化
リン・ハント著　松浦義弘訳
ちくま学芸文庫

人民により落とされた王の首。その歴史的「瞬間」は、いかにして持続する「出来事」となったのか。本書は多様な資料を用いて、革命を正当化した文化の諸力を暴き出す。自由の木といった象徴や、封建社会に存在しなかった新しい政治階級が、人々の日常に広がりゆく。市民も労働者もない。今に残る民主主義への確信は、こうして強固なものとなっていった。　（五一二頁　税込一七六〇円）

（きもの／とよ）

## 哲学の教科書

中島義道著
講談社学術文庫

哲学とは何か――この問いへの応答は意外に難しい。この「教科書」の著者曰く、それは人生論でも思想でさえもない。では結局、それは一体何なのか。「哲学は何の役にたつか」「なぜ哲学書は難しいのか」といった直球で投げかけられた問いとともに、ページを繙いて確かめたい。もちろんここに示されるのは、ひとつの見方にすぎない、という留保はつけた上で。（三八四頁　税込一二八七円）

## 偶然性と運命

木田元著
岩波新書

貴方は何故、私と出会ったことを「運命」と呼ぶのか。これまでの過去の意味が、現在によって彩られたからか。二人が生きている「時間」それ自体が、変貌したからか。恋愛にまつわる「めぐり逢い意識」に触れながら、「偶然」と「運命」について思考する。哲学の巨人たちの肩に乗り、生きている世界を問い直す体験を、この一冊は確かにもたらすだろう。（二〇四頁　税込八五八円）

（八雲／ましゅ）

## 空間の詩学

ガストン・バシュラール著
岩村行雄訳　ちくま学芸文庫

バシュラール詩学の頂点と言われる本書は、「詩的イメージ」の価値を探っている。「詩的イメージ」は儚い。イメージの生まれでる瞬間に現在すること、そして「きらめく光のなかにひそ」むイメージの尻尾を掴むことで、初めて近づくことができる。

家、宇宙、戸棚、貝殻……。私たちを取りまく身近な空間が発している、瞬間的で可変的な光を探る。（四四八頁　税込一七六〇円）

## 知覚の哲学：ラジオ講演1948年

モーリス・メルロ＝ポンティ著
菅野盾樹訳　ちくま学芸文庫

メルロ＝ポンティ自身の言葉にふれながら彼の哲学に入門するなら本書を勧める。当時四〇歳、気鋭の哲学者として活躍するメルロは「若々しく弾む声調」で語りかけた。ヴァレリーやセザンヌなど様々な対象を考察しながら、古典世界から現代世界への、意識から身体への「存在論的転回」を企てた彼の遠大な射程が、訳者の丁寧な解説によってより明らかとなる。（四二五頁　税込一六五〇円）

（芷漠／石透）

## 資本論（全九巻）

カール・マルクス著
岡崎次郎訳　国民文庫

言わずと知れた名著『資本論』。「労働者の聖書」とも呼ばれる人類必読の書。その翻訳は数多いが、本書を選んでおけば間違いない。労苦をいとわず、本書を読み通した者には、きっと新しい世界が拓けるはずだ。現にマルクスも言っている――「学問の険しい坂道をよじのぼる労苦をいとわないものだけに、その明るい頂上にたどりつく見込みがあるのです」と。（一巻　四一六頁　税込一三二〇円）

## フーコー・コレクション（全六巻）

小林康夫、石田英敬編
ちくま学芸文庫

ミシェル・フーコーは哲学者であり思想家であり政治活動家であり文芸評論家でもあった。彼の挑むテーマや残した著作は数知れない。このコレクションは彼の思想をテーマ別に収録しており、1から順に読まずとも興味のある分野から読み進めることができる。彼の主著はまだ文庫化されていないため、彼の知を学ぶ足掛かりとしてまず本書を読むことを勧める。（一巻　四四二頁　税込一五四〇円）

（ぱや／トントゥ）

## きみの言い訳は最高の芸術

最果タヒ著
河出文庫

見逃せてしまうような感情の機微、話題にするにはささやか過ぎる発見。「今何考えてる?」とか聞かれると、何も言えなくなってしまうような。そういうので頭がいっぱいだからといって、あなたは空っぽな訳ではない。「友達はいらない」「季節も私の一部分」『みんなだいきらい』な人がすき」。エッセイの一つ一つが、曖昧な情動を、言葉で鮮やかに捕まえている。（一九二頁　税込五五〇円）

## 京都のおねだん

大野裕之著
講談社現代新書

「料理」のお値段は二万五千円から。秘もみじは千円、お地蔵さんのお貸し出し三千円。お値段を知ると暮らしが見えてくる。特に京都では、独特の感性や人間関係が値段の裏に潜んでいる。生活の定式を重んじ、「本物」にこだわり、そして意外と新しいもの好きな人々が作ってきた「京都」に迫る。大学生活に深みが増すこと間違いなしの本、たったの九九〇円。（二二四頁　税込八八〇円）

（芫漠）

## 四畳半神話大系

森見登美彦著
角川文庫

京大三回生の主人公が、理想のキャンパスライフを目指して、変人どもとテンヤワンヤする話。本書の主人公は、理想の女性・明石さんを追い求める。それも一興。悪友の小津は無意味な行動に命をかける。それも一興。……きっと、君にも見つかるさ。本書のような、ワクワクする「京大物語」が。本書の描く「京大」と二〇二二年の京大が、たとえどれだけ違えども。（四〇六頁　税込七四八円）

## 社会学史

大澤真幸著
講談社現代新書

体系的に学ぶことが必要とされる学問の一つが社会学だ。『社会学史』は、社会学の歴史を物語的に読み解き、学術的な議論のコンテクストを教えてくれる。史実の正確性という観点から、内容について賛否両論があったものの、社会学の諸概念を理解するためには、それらが生み出されてきた歴史的必然性を知ることが重要である、ということを痛感させられる一冊だ。（六四〇頁　税込一五四〇円）

（出席点／ましゅ）

## コンプレックス

河合隼雄著
岩波新書

意志を持ち主体的に生きているはずの我々は、意識できない大きな何かに揺り動かされている。対人恐怖、劣等感……多感な学生生活の中、様々な「コンプレックス」が顔を覗かせる。知らないものに悩まされるより、知っているものに悩まされる方が、ずっといい。ユング学派の大家を訪ね、「コンプレックス」を知り、己を知る。一つの健全な「主体」であるために。（一七三頁　税込九〇二円）

## あいだ

木村敏著
ちくま学芸文庫

統合失調症を中心とする臨床経験と精神病理学を軸にした思索から紡がれた木村の著作は世界中で読み継がれていく。「自ら」の限定的な自己ではなく、「自ずから」捉えられる自他未分化の「あいだ」への木村の探求は自己論を越え、「生きとし生けるもの全ての生命の根源」と「われわれ」のつながりを明らかにする。昨年亡くなった「あいだ」の巨人の代表作。（二一八頁　税込一〇四五円）

（ましゅ／石透）

# 新刊コーナー

## 送別の餃子

井口淳子著
灯光舎

中国農村をフィールドに民族音楽研究を行う著者、井口淳子。当時には珍しい中国農村での研究を選び、農村で行われる演劇や演奏を聴き、演奏の場に集う人々との交流を共に体験してきた著者。このテーマを軸に、彼女が研究者人生を歩みながら得たもの、それは卓越した中国農村に対する知識と、中国で出会った生身の人間の強さとしなやかさ、そしてやさしさであった――。

本書は、研究書でも料理本でも日記でもない。描かれるのは、著者が年月を重ねるごとに思い浮かべる「人」にまつわる思い出たち。お金を一円も使わず日本旅行を成し遂げた高老師（ラオシー）、人懐っこく誰よりも情報をもつ雑狗（ツァーコウ）、パリに長く住みながら観光客風の装いをし続ける丁氏（ティン）。他にもユーモアや哀愁漂う人々が登場し、読者の心に色濃く残る。その文章は、研究成果として記述された「完成品」ではなく、人との関係を構築していく過程が垣間見える貴重な「生」の話である。また、著者の説明と共に添えられるイラストによって、料理や風景に恋しささえ覚えてしまう。人々の所作や想いが丁寧に紡がれた本書は、餃子の皮のように優しく読者の心を包んでくれる。

著者は「人を信じよ！」と言う。そこから読み取れるのは、メディアから得たものを鵜呑みにし、一義的に誰かをあるカテゴリーに当てはめることへの警鐘であろう。醜い誹謗中傷が目立つ現代社会には、生身の他者と語らう時間が足りないのだと。　（トントゥ）

（二二四頁　税込一九八〇円　10月刊）

## あのころなにしてた？

綿矢りさ著
新潮社

異常事態が日常となった二年間を、「あのころ」と呼べる日はいつになるのだろうか。

本書は、芥川賞受賞者でもある綿矢りさ氏が書いた「日記」である。しかし未曾有の疫病が、この「日記」にフィクションのような非現実さを与えてしまった。以前は、人から病気を移されないための防具であったはずのマスクが、他者に配慮できる真っ当な人間であることを示すドレスコードとなったように、私たちの生きる世界はすっかり様変わりしてしまった。貯金を下ろす際、ボタンを押す指に走る緊張感。人混みを歩く時、自然と速まる足の速度。この社会にいる限り、誰もが一人の「生活者」であり、波打つかのごとく移り変わる情勢に、絶えず翻弄され続けてきたことだろう。

時代の影響を受けない職業などない。著者も一人の作家として、「物語を作る」ということを再考させられることとなった。もしも感染拡大が収まらない場合、現代的な世界の描写に必要な要素が変わってくるという、由々しき問題に苛まれていたのだ。

それでも「失ったことだけでなく、得たものに目を向けてみよう」と投げかける著者の言葉は、非常に心強い。コロナ禍に尊い青春を奪われた学生は大勢いて、私も間違いなくその一人だ。それでも、この社会状況だからこそ、当たり前であったはずの「繋がり」が愛おしくなった。遠い未来で、大事な何かに気づけた「あのころ」を振り返られるように、この日々をただただ生きる。　（ましゅ）

（一一一頁　税込一四三〇円　9月刊）

## 遠慮深いうたた寝

小川洋子著
河出書房新社

『博士の愛した数式』『猫を抱いて象と泳ぐ』など、痛いほど繊細で緻密な小説を書いている小川洋子氏の九年ぶりのエッセイ集。どんな細やかな目線で日常を綴られるのだろうと思っていたら、想像以上だった。

日々にひそんでいる、普通の人ならごまかしてしまいそうな陰を、著者は取りこぼさない。なぜか惨めな記憶ばかり蘇り「記憶の地層」に潜り込んでしまう近所の階段。ヤモリの死体の後脚が大事に挟んでいた、亡き飼い犬の毛。野球というゲームの、いつ終わるか分からない恐怖。心細さや気味の悪さはそこら中に転がっている。

そんな世界を著者が乗り越えていけるのは、ふとした気づきに空想を吹き込み、物語を膨らませてしまう逞しさゆえだ。春、豆ごはんのえんどう豆を剥きながら、そのか弱さといじらしさにボブスレーを重ね合わせる。忽然と消えた電車の切符は、きっと小人が三角帽子を新しくするのに役に立っているだろうと納得する。

エッセイは、ちょっとした魔法のようだと思う。ほんの数ページ、作家の視線に触れただけで、なんの変哲もない自分の日常が、書き手の目を通した体験に色づく。

本書の陶器のような装丁は、小川氏の「魔法」にぴったりだ。巡り合う小さな出来事の一つ一つに敏感になり、それらが集積して、日常を超える壮大な物語が頭の中に広がっていく。この本を開くとき、そんな不思議な力がずっしりと詰まった特別な箱を、そっと開けるような慎重な気持ちになる。（茫漠）

（二四八頁　税込一七〇五円　11月刊）

## 言葉を失ったあとで

信田さよ子、上間陽子著
筑摩書房

「アディクション・DVの第一人者」であるカウンセラー・信田さよ子と、『海をあげる』など沖縄の社会調査で著名な教育学者・上間陽子。語りの言葉を「聞く」ことを生業とする両者が、「聞く」営みについて徹底的に対談する。

対談の冒頭から何度も「加害と被害」がテーマとなる。その当事者の語りを聞くのは非常に難しい。難しいからこそ、両者の「聞く」工夫は示唆に富んでいる。例えば信田は、カウンセリングの際に「言葉を禁じる」。「自分は虐待を受けたから自己肯定感が低くて……」という語りをする人には、「自己肯定感」を別の言葉で言い換えてもらうという。上間はすかさず「現場ではどういう言葉が残るんですか?」と聞く。信田は「母の眼差しが自分をCTスキャンしてるような目だった」というような「比喩の豊かさ」が残ると返す。

金銭の授受の有無など、是々非々のあるテーマで対談は続く。調査の許諾に関する対談で、上間は協力者に調査の同意書を極力求めないと語る。倫理的配慮は確かに重要である。しかしその同意書は協力者から訴えられた際に「勝てるようなものを置いておく」ためのものである。上間は「でも、ダメなんですよ、それは」と続ける。真摯に「聞く」姿勢は、同意書を交わしておけば良いという昨今の倫理的配慮の風潮に対する何よりの批判となる。

言葉を失うほどの体験をした人が再び紡ぐ言葉はどんな言葉よりも痛切である。彼らに向き合い続ける二人の「聞く」営みは、言葉の再生に寄り添う過程なのであろう。（石透）

（三五二頁　税込一九八〇円　12月刊）

## 同志少女よ、敵を撃て

逢坂冬馬著
早川書房

猟師の娘セラフィマは自分の住む村をドイツ軍に襲撃され、母親を目の前で殺された、ドイツの狙撃兵に。殺される直前でソ連軍に救出された彼女の目の前で母の遺体は焼かれた、ソ連の狙撃兵に。そして狙撃兵は彼女に告げる、「お前は戦うのか、それとも死ぬのか」と。

母の生死を踏みにじった者に復讐を。セラフィマは連れて行かれた軍の訓練学校に入り、狙撃兵となることを決意する。養成を終え、実戦に叩き込まれて戦地を巡るうちに、彼女は復讐の相手が同じ戦場にいるらしいことを知る。しかし狙撃兵の勘なのか、相手は彼女らの狙いをかい潜り、戦場から退却してしまう。狙う者同士、ならば狙うためにまず狙われろ。確実に相手を仕止めるために彼女は自分を囮にし、敵に自分の存在を知らしめる。とうとう、戦場で相手に遭遇した彼女は……。

これはセラフィマの物語であり、同時に彼女を介して戦時中の女性の姿を描き出す物語でもある。同じ訓練学校で出会う女性狙撃兵の卵たち。彼女らのバックグラウンドからはソ連の歴史が垣間見える。戦場でドイツ兵の愛人となったソ連人女性。彼女はソ連・ドイツ双方から煙たがられる存在でありながら、双方の拠点場所へと入る自由を持つ立場でもある。

戦争という非人間的な行為の場所に置かれるがゆえに彼女らの人間的な一面がより露わになる、これまで注目されることの少なかった女性から見た戦争を知ることの出来る一冊になったのではなかろうか。（ねこ）

（四九六頁　税込二〇九〇円　11月刊）

## もっと知りたい 柳宗悦と民藝運動

杉山享司監修
東京美術

「暮らしに用いられる無銘の雑器にこそ、非凡な美が宿る」――柳宗悦はこの確固たる信念にもとづいて、民藝運動を主導した。これはまったく新しい美の考え方だった。上手物ではなく下手物にこそ真の美が宿るというのだから、この考えは当時の人びとをきっと驚かせたに違いないだろう。「柳宗悦と民藝運動」と題された本書は、そんな柳宗悦が民藝に美を見出していくまでの過程、ならびにその過程で出会った人びととの交流を描く。民藝珠玉の名品も、オールカラーで紹介されているため、読んで楽しい見て楽しい、入門書として最適の一冊となっている。

だがそもそも「民藝」とは何なのか。これは「民衆的工藝品」の略語で、民間で用いられる日常品を意味する。柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司がその名付け親だ。彼らは「日常の実用品として製作されたもの。何らの美の理論なくして無心に作られたもの。貧しい農家や片田舎の仕事場から生まれたもの」に目を向け、そこに美を見出した。名高い天才によって作られた作品に宿る美ではなく、名もない職人によって虚心に作られた実用品に宿る美。すなわち用の美。これを彼らは発見したのだ。そしてこうした民藝論の根底にあるのが「美は創り出すのではなく、与えられるものだ」「自分が仕事をするのではなく、自分を超えた何か大きな力が仕事をなしてくれるのだ」という「他力の美」の思想なのである。

昨年は、柳宗悦没後六〇年、民藝誕生からおよそ一〇〇年という節目の年だった。民藝を学ぶ絶好の機会ではないだろうか。（ぱや）

（八〇頁　税込二二〇〇円　9月刊）

## 中世の身体
### 生活・宗教・死
ジャック・ハートネル著
飯原裕美訳　青土社

万病に効く乾燥アナグマ、睡眠薬にはマンドラゴラ。迷信に支配され、停滞した時代、中世。このような印象とは裏腹に、身体機能に対する当時の人々の好奇心と想像力は留まることを知らない。本書は、中世ヨーロッパと周辺地域で抱かれた身体に関する認識と、それに付随するメタファーなどを掘り下げる一冊である。絵画、文学、医学書、料理本から遺骨に至るまでの様々な史料を渉猟していくなかで、中世、ひいては現代ヨーロッパの基部をなす概念や文化を知ることもできる。例えば、皮膚への考察のなかでは羊皮紙の歴史に寄り道し、心臓についての議論では騎士道恋愛詩へと我々を誘うように。

人体は神が創った小宇宙だった。その謎を解明する営みは、医療行為であるのみならず、神とこの世界を知るための精神的探究でもあった。皮膚という薄いヴェールで覆われた内側は、外部世界と完全に隔てられるものではない。神の創ったこの世界という大宇宙は常に、身体という小宇宙に干渉し、変化を加える。この変化を良い方向へ導くために中世は、経験と哲学的・宗教的思想、そして想像力を総動員した。こうして構築された中世の身体（世界）観は、科学に拠って立つ現代の世界とは比にならぬ独創性と応用力を備えていた。

言葉通り、心臓が感情を抱き、脳が思考した時代。今日、己の体に想像力を働かす人はいないだろう。今、自分の脚は何を求めているのか、目は何を見たがっているのか。そんな想像を働かせてみれば、いつもと違う世界を体感できるかもしれない。（**投稿・はらん**）

（四一三頁　税込三九六〇円　1月刊）

## 綴葉編集委員募集および投稿募集のお知らせ

『**綴葉**』編集委員会では、編集委員を新たに若干名募集します。

仕事内容は、毎月二～三本の書評を書くこと、毎週金曜日に行われる編集会議に出席して『**綴葉**』の編集作業に携わることです。編集委員には毎月若干の活動手当と、書評で取り上げた書籍の代金が支給されます。

対象は、京都大学生協加入者で大学院の修士課程ないし医学部の五回生以上、そして左記の仕事を継続して行うことが出来る方です。

この条件を満たし編集委員としての活動を希望される方は、本誌添付の読者カードに編集委員会への参加希望の旨を明記の上、生協のひとことポストに投函するか、『**綴葉**』表紙記載のメールアドレスへ直接お問い合わせ下さい。追ってご連絡差し上げます。

また、読者の皆様からの投稿も随時受け付けています。採用させて頂いた方には、書籍代（上限二五〇〇円）および薄謝を図書カードにて差し上げます。ふるってご投稿下さい。

書評の形式は次の通りです。

①「新刊／新書コーナー」：新刊二〇字×三二行、新書二〇字×二三行。出版されてから半年以内の書籍を対象とします。

②「最近読んだ本」：三〇字×四二行。普段の読書の中で特に面白かったものを紹介、批評して下さい。刊行時期の制限はありません。二冊以上取り上げたい場合はご相談下さい。

いずれの場合も、書名・著者名・出版社名・総ページ数・発行年月・税込価格と投稿者の氏名・所属・連絡先・ペンネームを明記して下さい。郵便・メールどちらでも受け付けます。宛先は本誌表紙を参照して下さい。

（**綴葉編集委員一同**）

# 息づくシネマトグラフの息を継ぐ

近ごろ出町の映画館で、ある映画作家のリバイバル上映が盛んである。ロベール・ブレッソン（一九〇一～一九九九）。この歴史的シネアストは、厳格なリズムの映画で官能的な息遣いを体感させてくれる。その特異な形式について、生前彼は多くを語っていた。

**リズムのためのシネマトグラフ**

フランスに生まれ四〇年代から映画を作り続けたブレッソンは、徐々に己の方針を固めていく。その中で書き継がれた断想が、『**シネマトグラフ覚書**』にはまとめられている。ブレッソンは自身の映画に〈シネマトグラフ〉という名を授ける。複製された劇としてのシネマと自作とを区別するために。

シネマトグラフの映画。そこにおいては、表現が獲得されるのは映像と音響との諸関係によってであり、物真似によって、身振りや声の抑揚（俳優のそれであれ非＝俳優のそれであれ）によってではない。それは分析しない、説明もしない。それは組立て直す。

演技する俳優に代ってブレッソンは〈モデル〉を用いる。意識を排し動作や発声を自動的に処理するモデルたちの「肺と心臓のリズム」を、彼は重視する。そして映像のリズム、音声のリズムが組み合わさり、シネマトグラフの息遣いが創造される。

リズム。／リズムの持つ絶大な力。／持続しうるのは、リズムの中にはまりこんでいるものだけだ。内容を形式に、意味をリズムに従わせること。

**すでに絶えた息を継ぐこと**

「映画のリズムはエクリチュールのリズム、心臓の鼓動のリズムでなければなりません」。このような証言が、近年邦訳された『**彼自身によるロベール・ブレッソン　インタビュー　一九四三―一九八三**』にも収められている。心臓をもつシネマトグラフは生々しい。うねるスリの手や囚人の顔、歩き、走り、横たわる人。それら肉体を動かす呼吸が、ブレッソンが度々言及する「空気」を循環させている。それだけではない。作家は述べていた。「私は愛を信じています。愛しか信じていないと言ってもいい」。（あなたの人物たちを導いているものは欲望ではないかという問いに対し）「生きる欲望です」。このような言葉を読む時、彼の映画に息を呑み溜息するあの時間が思い起こされる。シネマトグラフを観ていると、観客の呼吸もリズムを帯びるのだろう。呼吸を共有することで、観客たちは映画中の生と死を、官能で感じ取ることができるのである。

リズムの秩序を尊ぶブレッソンが、環境汚染を取り上げたのは偶然ではなかろう。一九七七年の『たぶん悪魔が』公開に際し、彼は言った。「若者は、人類が想像だにしなかった、この上なく破壊的なシステムを相手にすることになるのです」。複数のリズムが絡み合うシネマトグラフの心音は、地球の息遣いなしにはあり得ない。『たぶん悪魔が』は、近く日本劇場初公開の予定である。　（とよ）

# 俺が京大で読んだ本

本との出会いは、恋に似ている。あの日、あの時、あの場所で出会っていたからこそ、他の何万冊とは違う、特別な一冊になる。これから京大での生活が待ち受けている君に、今回は、京大を去りゆく男の話をしよう。俺の独り言だと思って聞いてほしい――

**二回生の春、俺は総人広場で哲学に出会った。**

あの日、あの時、俺は総人広場にいた。三限をサボり、優雅に読書というわけだ。ヴィトゲンシュタイン『**論理哲学論考**』を読んでいた。先輩が読んでいた一冊。少し背伸びした気分で、哲学書を読む自分に酔っていた。この道に関してはメッキリの門外漢。ハッキリ言って、何も解らなかった。本書は前期ヴィトゲンシュタインの代表作で、思考の限界を定めようとするもの。その姿勢は「私の言語の限界は、私の世界の限界を意味する。」の言に現れていよう。言語と世界の対応関係を示さんとする、本書の試みに、二回生の俺は痺れた。これが俺と哲学とのファーストコンタクトであり、それ故に、本書は俺にとって忘れられない一冊になった。

**森博嗣の思考に追いつきたくて、俺は毎日ルネに通った。**

最初は軽い気持ちだった。ルネのセールで何気なく買った一冊。それがすべての始まりだった。森博嗣『**すべてがFになる**』――第一回メフィスト賞受賞作にして、森博嗣ミステリの原点。本書に出会い、俺の大学生活は一変した。絶海の孤島で、天才・真賀田四季が魅せる密室殺人。その謎を犀川壮平と西之園萌絵が解き明かす。こんな内容の本だ。本書を「理系ミステリ」と評するのは乱暴かもしれないが、森博嗣作品を知らない人に紹介するには、この説明が一番わかりやすいと思う。著者の森博嗣は、某国立大学の工学部でアカデミアの世界に身を置いている。その知見によるものなのか、本書で使われる「理系ワード」は、およそ素人では理解の難しいものばかり。本書はそんなガジェットが注目されがちだが、形式よりも内容こそが、本書を本書たらしめている。タイトル「すべてがFになる」の意味。真賀田四季が仕掛けたトリックと、その答え。犀川と西之園の掛け合いも面白く、読み始めたら止まらなかった。森博嗣の魅力に取り憑かれた私は、一日一冊のペースで読み進めた。昼休みごとに、ルネに続きを買いに行く日々。本書を何の気なしに買ったことで、俺は三年間を森博嗣に費やすことになった。

**ゲームからディストピア小説へ。俺は新たなジャンルを知った。**

いつのことかは覚えていない。あの日、俺は先輩の家でボードゲームをしていた。そのゲームの世界観が大好きだった。聞けばそのゲームはある本から着想を得ているという。そして、俺はその本を手に取った。ジョージ・オーウェル『**一九八四年**』、ディストピア小説の金字塔だ。舞台は〈ビッグ・ブラザー〉が支配する全体社会。主人公は歴史の改竄を生業にしている。彼は自分が身を置く社会に疑問を抱き、支配に反旗を翻そうとする。この本で、俺は初めて「ディストピア小説」なるジャンルを知った。本書の社会では各地にスクリーンがあり、人々の生活を監視している。そして反逆者はどうなるかというと……。「BIG BROTHER IS WATCHING YOU」――あまりのリアリティに、俺はフィクションであることを願った。

――とまあ、こんな話だ。君と俺は、きっと出会うことはない。でも、君と俺は同じ本を読むかもしれない。君がこれからどんな本に出会うのか。君の話も、いつか俺に聞かせてほしい。（**出席点**）

# 編集後記

幸か不幸か、この号をもって編集委員を辞めることになったわけだけれど、ことここに至ってもまず思い出されるのは（ここではちょっと言い尽くせないくらいの）内部的な面白くない出来事の数々、というのは冗談みたいな本当の話で、しかしそれでいて（一時的な活動休止を挟みつつ、あるいはぶつくさ文句も吐きながら）心折れず、最終的になんとかここまでモノを書きつづけられたのは、今にしてみても何とも不思議なことでした。各方面お世話になった方々に一言、「どうもお世話になりました」。あるいは更にもう一声、「それではサラバ、ごきげんよう」。　（八雲）

腹を括り、大人しく東京で働くことにした。自分の人生を誠実に生きなければ、どんな音楽を聴いてもどれだけ本を読んでも、決してものにならないのだと、確かにそう思い知らされた六年間だった。偽物たちの宴は今夜も華やかに、やけに賑やかに。思惑に塗れ、嘯き合っては溺れ、塩さえ甘いと讃える人々。嗚呼、全部消えてしまえばいいのに。思えば僕は、ずっと同じことを呟いてきた気がする。「ホンモノになりたい」。そのために自分の人生全てを使っても構わない。これまで有難うございました。旅立ちます。救いようのない偽物より。　（ましゅ）

# 当てよう！ 図書カード

寒さも少しずつ和らいできたものの、まだまだ風が冷たく、春が待ち遠しい季節ですね。さて、三月といえばひな祭りですが、京都では人形ではなく人間が着付けを行いお雛様になる、珍しい催しがあります。その祭りが行われる寺社は、次のうちどれでしょう？

1. 下鴨神社　　2. 宝鏡寺
3. 市比賣神社　　4. 上賀茂神社

（茫漠）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先（https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7）から応募することも可能です。正解者の中から 5 名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは 4 月 15 日です。

《11 月号の解答》 11 月号の問題、「小春日和を英語で言うと？」の正解は、1. の Indian summer でした。北米での呼び名だそうですが、なんでこんな呼び方になったんでしょうね。

図書カードの当選者は、ハードラーさん、大三元さん、月食楽しみさん、Soso さんの 4 名です。当選おめでとうございます。そうそう、図書カードを欲しい方は読者カードに名前と住所の記入をお忘れなく！　（ねこ）

# 読者からひとこと

○「ちいさい秋みいつけた」は、本を「読む」以外の視点からの体験が感じられる、ほっこりする書評でした。いろんな本屋、巡ってみたいです。　（工学研究科・Ｓｏｓｏ）

――京都には趣のある本屋さんがあちこちにありますよね。暖かくなったら、短縮営業が終わったら、ぶらりと行ってみたいな、と自分も思うのですが、心のままにあちこち行っても不安に思わなくて済むようになるのはいつになることやら……。

○面白い書評を読むと、思わず、ああ本が読みたいよなあ！　とつぶやきます。以前、人生を一度きりにしないために読書するという話を読んで、綴葉を読むたびに様々な人生を思います。全ては読めないけれど、書評に触れるだけでも、考え方が広がる気がします。

（工学研究科・ねこねこ５５５）

――三木清曰く、「我々はつねに読書に好都合な状態にあるのではない。読書に好都合な状態ができてから読書しようと考えるならば、遂に読書しないで終るであろう。」ということなので、まず本を開いて。読書していていいのか？　などの心配はあとで考えればいいのかもしれないですね。　（ねこ）